**２０２０年度　入門講座**

2020年11月1日（日）

**第十九課　最後の食事**

**Ⅰ　エルサレム入城**　ヨハネ12:1-16,20-26

　　　受難週の初めの日曜日を「パームサンデー」と呼ぶ。民衆は棕櫚の枝を持って主イエスを迎えた。その時の枝が、日本の棕櫚とは違うようだということで、共同訳聖書「なつめやしの枝」（=「不死の印」）と訳されている。

その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、なつめやしの枝を持って迎えに出た。そして、叫び続けた。

　「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に。」

イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる。ろばの子に乗って。」

弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。

　イエスがラザロを墓から呼び出して、死者の中から甦らせたとき一緒にいた群衆は、その証をし

ていた。群衆がイエスを出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたから

である。そこで、ファリサイ派の人々は互いに言った。「見よ。何をしても無駄だ。世をあげて

あの男について行ったではないか。」

祭りに来ていた大勢の群衆（弟子達よりもはるかに熱狂していた人たち）迎えられたイエスの地上での最も華やかな日だったと言える。

１．ラザロの蘇りを見た群衆

２．各地からの巡礼者（ラザロの話を聞いた）

群衆とは何か？　同じ群衆が数日後にイエスを十字架につけろと叫んだ。

　この大衆の移り気、愚かな事か！イエスはこの群衆の愚かさをよく知っていたろうに、ばかげた騒ぎを避け

なかった。自分を王として担ぎ出す群衆に迎合するかのように迎えられてエルサレムに入城した。

　祭りに来る巡礼者　巡礼する理由は死を恐れるから。

信仰の歌を歌いに歌った。（詩編48）

都の壮大さをみて、死を超えて導く神の偉大さ、神の確かを感じた。

この城壁のように神は死に対してもたくましく、死に対する防壁となってくださる。

詩編118:26「ホサナ」祝福を祈る歌。

　ザカリア9:9 「娘シオンよ、喜び歌え・・・」王を迎える歌。

「娘シオンよ、おそれるな」と変形。

　　ついにその王が来たと、主イエスを迎えたとき心から賛美を歌った。群衆の熱狂は、イエスが死に打ち勝

ち、ラザロを墓の中から呼び出した人だから。群衆が歓呼したとき、その心の中にあったのは死を

恐れる思いである。

　　イエスはそのように、ご自分を命の主として迎えられることを受け入れられた。

　　平和の王として子ろばに乗って入城。イエスは武器を取っての戦いはしない。

死におびえている一人ひとりの心に、死に勝つ信仰を植え付けて下さる。

死との闘いをし始めておられたイエス→　今、人々の憤りによって殺されるが、復活される。

イエスと弟子たち、アジトに入って最後の食事の準備する。

**Ⅱ　最後の晩餐** **ヨハネ１３：１～１５**

　共観福音書ではパンを裂き記念を遺す場面の記述があるが、ヨハネ福音書では、その代わりにイエスが弟子たちの足を洗うという行為が述べられている。「足を洗う」という行為はパレスチナの風習で、祝宴に出かける前に沐浴し、家に入る前には足を洗った。

さて、過ぎ越し祭の前のことである。イエスはこの世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して**上なく愛し抜かれた**。夕食の時であった。すでに悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。イエスは、父がすべてをご自分の手にゆだねられたこと、また、ご自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。

それから、たらいに水を汲んで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいで拭き始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスが答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えられた。そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。すでに体を洗ったものは、全身清いのだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」と言われたのである。

さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。

「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。あなたがたはわたしを『先生』とか『主』と呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」

1. 「この上なく」というのは、「極みまで」「終わりまで」とも訳されており、中途半端でなく貫き通す愛が、ご自分をご聖体として私たちの内に留まることを可能にした、という意味である。
2. イエスは愛の心に突き動かされたように立ち上がった。イエスはご自分の時が来たことを知り、弟子たちの足を洗うという行動による遺言を残されたのである。。
3. あなた方はすでにわたしのものだから全身清い、そのことをもう一度確認のため足だけ洗えば良い。ペトロは自分がイエスに最も近い者と誇りに思っていたので、イエスの支配が成るとき自分も高位につけると願っていた。

ユダの裏切りの予告　イエスは例外なくユダの足も洗っただろう。この後ペトロもイエスを

否む。残念ながらこの清められたものの中から脱落者が出る。私たちの間でも大小の不注意で主を渡してしまうことがあるだろう！ユダは弟子たちの心に、そして私たちの心にも住んでいることを忘れてはならない。。

1. 「互いに足を洗いなさい」

このイエスの行為は霊的な清め、相手の罪をゆるしその心を清めることを意味する。

愛する者との別れを悲しみ惜しむイエス。洗足は、ただ「人に仕えるということはこういう

ことだ」と模範を示すものに終わるものではなかった。